

黄檗僧懷玉道温編『諸州伽藍開基記』について

高 井 恭 子

一 はじめに

すでに日本黄檗（黄檗と略す）は、既成禅仏教や施政者、天台門跡衆による支援を受けて、『黄檗版大藏経』（黄檗版と略す）製作を行ったことが分かっている。⁽¹⁾しかし、曹洞宗の参加についてはまだ明確になっていない。そこで本論は、黄檗（中国人）僧懷玉道温（一六三九—一七〇七）の『諸州伽藍開基記』（『伽藍記』と略す）八卷、元禄三年（一六九二）著述、西尾市岩瀬文庫所蔵稿本（稿本と略す）と、元禄五年（二六九四）十卷、国立国会図書館蔵刊行本（版本と略す）から、曹洞宗の寺列と結縁の実態を明らかにしたいと思う（固有名詞の字体は『伽藍記』に従う）。

二 『諸州伽藍開基記』の特徴と問題点

『伽藍記』著者の懷玉は、黄檗版頒布に尽力した黄檗第五代住持の高泉性激（一六三三—一六九五）の弟子で、寛文元年

（二六六一）に帰朝し、高泉の仏国寺志源庵に住した。自跋には、本書の編集理由を「余居^二志源精舎^一。禅餘無事。常閱^二元亨釋書及古今傳記^一。見^二國名山大刹^一、指不^レ勝^レ屈。誠不^レ昇^二天竺^一也。但名師英衲、韵士騷人。觀光遊覽者或作^二傳記、或作^二誌賦^一。往往難^レ辨^二其年代出處、及剏建師、與^二夫成壞隆替之由^一、不^レ能憾焉。余不^レ揣^二蒙昧^一、探^二其實跡^一。考^二其年代、勉成^二斯記^一。凡若干卷。」⁽²⁾とし、日本各地の諸宗の縁起沿革についてまとめた書と見られる。また、八卷扉識語「八卷／松寄浦／海□寺什物」（原本は寺名の一部が墨滅）からは、伊勢国一志の海禅寺（曹洞宗可睡斎末）の旧什物であったことが分かる。

筆者が注目する点は、目録で曹洞宗寺院に●印が付される点（版本でも確認）と、巻ごとの寺院構成である。本論は、これらを手がかりに、当該書籍が編集刊行された経緯と周辺状況を探ろうと思う。

三 検証

(一) 稿本（元禄三年）の特徴

稿本は全部で八巻である。巻一は、高泉の「序」の後、「攝州靈区」向原寺以下二六ヶ寺、「河州勝地」西琳寺以下一九ヶ寺。巻二に「和州靈区」元興寺以下五五ヶ寺。巻三に「山州名鑑」頂法寺以下八四ヶ寺。巻四に「諸州勝地」建福寺以下五六ヶ寺。巻五に「阿州靈刹」靈山寺以下二五ヶ寺、「讃州靈区」善通寺以下二四ヶ寺、「土州勝地」最御崎寺以下一五ヶ寺、「予州梵刹」觀自在寺以下二六ヶ寺。巻六に「京兆并鎌倉」とし、「京兆」建仁寺以下二九ヶ寺、「鎌倉」寿福寺以下五ヶ寺。巻七「禅林勝地」聖福寺以下六二ヶ寺。巻八に「禅林勝地」永平寺以下三二ヶ寺、「附」として「僧綱階」「戒壇」「度者禁制」「私営寺院禁」「貿易寺宇禁」「男女入寺制」「放生」「神祠舍利」、最後に懷玉道温の「跋」を載せる。⁽³⁾版柱は、上部は白口、版心は未刻、下部は黒口である。

特徴は、大きく次の通りである。

- ①全巻にわたり、寺社によっては、元禄二年（二六八九）を基準に開創からの年数が記される。
- ②内容は、開山・開基に配慮したとみられ、皇籍（含天皇）／聖徳太子／役小角／行基／仙人／弘法大師・伝教大師／寺門僧・山門／沙門・釈・比丘／高僧／その他（在俗）に分類さ

れる。

- ③巻一は、冒頭第一寺目の向原寺の前に「興造縁起」、第二寺目桜井寺を挟んで、「聖徳太子誕生」「百済日羅」、後ろに「十四年二月」が配される。次いで、坂田寺―天王寺―法興寺―「三年三月」「神武三十四代」「五年四月」―蜂岡寺―大安寺―「聖徳太子薨」と続く。

- ④③を踏まえて、巻一で見たように分類し、考察に用いる（分類図は、紙面の都合で割愛した）。

- ⑤本論が注目する曹洞宗寺院は、巻六に黄檗山・佛國寺に引き続き宇治興聖寺（「點黒圈者洞宗下也」）があり、二ヶ寺おいて洛西淨住寺、以下高臺寺・慈照寺・鹿苑寺、項末に宇治田原禪定寺が置かれる。巻七に豊後泉福寺など八ヶ寺を掲載。巻八には、越前永平寺・弘祥寺、越州慈眼寺・龍門寺、雙林寺を挟んで大乘寺・総持寺（并永光寺淨住寺）、臨濟宗等の寺院を挟み下野慶徳寺、越前龍泉寺を掲載する。

- ⑥稿本中には、向原寺（巻一第一寺目、淨土真宗）もあるが、この場合は開基だけを記するのが特徴である。

- ⑦既成禅仏教は、開山の修学と法系を重点的に記される。

- ⑧巻四「諸州精藍」冒頭は、江州建福寺―崇福寺―園城寺―新羅明神―石山寺―一乗寺―梵釈寺―粉河寺―高野山へと続く。白山―伊勢太神宮が巻中程に記される。

- ⑨巻六「京兆」は、臨濟古刹に続き黄檗山―仏国寺―興聖寺

を配置。

⑩巻七「諸州禪刹」は、禪の高僧が天台と関係が深い点特徴的である(万寿寺神子榮尊が永勝寺琳公から台学を習得した／雲樹寺覺明国済は天台の具足戒・法華・止観を修じたことなど)。

⑪巻八「諸州禪林勝刹」は、冒頭から永平寺をはじめとする曹洞宗寺院を収載し、大乘寺に続き「総持寺并永光寺淨住寺」がある。総持寺には瑩山紹瑾(一二六八—一三三五)の業績を付す。

⑫当初「七巻本」を予定した可能性⁽⁴⁾がある。

(二) 刊本(元禄五年)の特徴

版本の元禄五年刊十巻本は、次の点で注目する。

目録第一紙に「武州善明寺蔵」印、「序」題下に「臨済正宗」の楕円(書き)印がある。全巻の版柱は、上部白口、版心「伽藍開基記(巻数)(丁数)」、下部黒口、目録からルビを付す。構成は、次の通りに変更されている。

①巻一は、高泉の「序」の後、「興造縁起」―向原寺：「聖徳太子薨」までは稿本と相違なし。刊本では、稿本が続く勝尾寺・箕面寺以下を第一巻に収載したが、稿本「河内勝地」にあった鷺尾山(真言宗醍醐派)を、第二巻「攝州靈区」へ移動、「河内勝地」分までを収載する。

②巻二は、稿本に無かった寺院に、開山の情報が加筆される(中山寺―聖徳太子／有馬温泉寺・毘陽寺―行基／須磨寺―役小角／

淨光寺―弘法／摩耶山は宇多帝勅願から法道仙人へ変更など)。ほかに貴人・高德・高僧の活躍を加筆する(有馬温泉寺―行基の経歴／中山寺―聖徳太子の寺院建立譚／清澄寺―経蔵建立／久安寺―弘法による『般若経』書写／鷺尾山―役行者の手植えの桜／葛井寺―行基「千手観音」制作／天野山―弘法『金字法華経』手写・聖武帝『勝王経』手写・光明皇后『妙経』手写など)。

③巻三は、寺社の順列に移動は少ない。一方で情報の加筆がある(元興寺―道昭の経緯／禪林寺―役小角の「高加茂」の由来／長谷寺―行基が「千手観音」落慶を執行／東大寺―聖武帝が行基より「菩薩戒」を受ける／招提寺―鑑眞「止観・玄義・文句」を将来／西大寺―「開山」道鏡を「開基」称徳帝に変更／龍泉寺―吉野大峯の次から巻末へ移動、代わりに天川辨才天を配置)。

④巻四「山州名利」は、稿本巻三「山州名藍」分を収録。頂法寺六角堂―広隆寺―神護寺―愛宕山―鞍馬寺―延暦寺―東寺―清水寺―禪林寺―泉涌寺―六波羅蜜寺までは寺列に移動無し。次の戒光寺が抜け、智積院(繰上げ)―蓮華王院、知恩院大谷寺(繰り下げ)―百万遍智恩寺・金戒光明寺といった浄土宗寺院が続く。

⑤巻六「諸州精藍」は、巻末を除き稿本巻四と移動なし。

これらの特徴は、次のように考えられる。

すなわち版本は、寺院や高僧の法系に配慮して巻構成される。それは、天台、ことに寺門本山派修験に対する配慮で、

特徴から見ても格別と見られる「(一)②④⑧⑩」。寺門本山派修験は聖護院門跡を拠点とし、同著が重点をおく皇籍の開創という点でも矛盾はない「(一)④」。皇籍の開創による寺社は、役小角や行基といった高徳の開創寺社と関係が深い「(一)②(二)②③」。聖武帝が行基より菩薩戒をうける。鑑眞が「止観・玄義・文句」を将来する点「(二)③」からは、諸寺院が南都仏教や寺門を継承することになる。

曹洞・臨済・浄土宗の宗祖たちは、稿本版本ともほぼ寺門出身であるので「(一)④⑩外」、禅宗や浄土宗は円滑に皇籍や高徳に開創された寺社の歴史を継承することになる。つまり、直接的に関係がなくても、歴史上、寺門や黄檗と矛盾なく結縁されるのである。ほかに、弘法や聖武帝・光明皇后の写経、清澄寺の経蔵建立や高僧と大蔵経にも注目できる「(二)②」。これにより、曹洞宗・浄土宗寺院が「(一)⑤(二)④」、黄檗が印行する明朝由来の大蔵経と矛盾ない結縁を示されることになる。

四 考察

本章は、両本と元禄二年以前に目を向きたい。

まず、翌三年に智恩寺へ黄檗版が納入された（智恩寺版と略す）。「(二)④」は、浄土宗における智恩寺の寺順を示している。が、智恩寺版では不完全であった巻末情報・目録を、

臨済宗三河華藏寺への納入（元禄十五年、宝洲版という⁽⁶⁾）に向けて調べようとした時期である⁽⁷⁾。その華藏寺は、その後、檀越吉良家の断絶や黄檗版校訂によって宝洲版を秘し、白隠慧鶴（一六八六—一七六九）の法系整備だけを行った⁽⁸⁾。

他方、筆者は曹洞宗の黄檗支援拠点は龍溪院であったと見ている。それは、黄檗支援大名の檀寺（三河長圓寺、若州空印寺、総州永井寺）で輪番を勤めたからだ⁽⁹⁾が、住職であった月舟宗胡（一六一八—一六九六）や面山瑞方（一六八三—一七六九）が大乘寺へ転住すると、黄檗を離れ曹洞宗独自の宗統復古や『清規』類研究に着手していった⁽¹⁰⁾。したがって、高泉が支援した寺院を立てていたのは当然と思われる。

さらに、『伽藍記』には「師前遊^二南都招提寺^一、時見梵相甚多。皆散^二置於殿角^一、塵埃滿漚。師見嘆^レ之、因勤以施^レ人寺僧。欣然以^二一軀^一獻^レ師。其高三尺許、即開山鑑眞律師上首。唐思託阿闍梨所^レ造也。」⁽¹¹⁾といい、高泉と鑑眞和上との結縁を記している。すると、山州と能州の浄住寺の記述が混同されやすい状態にあるのも注目に値する。浄住寺は、黄檗の布教に尽力した鉄牛道機（一六二八—一七〇〇）が叡尊（二二〇一—二二九〇）開創の南都律宗西大寺末の山州浄住寺を改宗重興したものであるし、曹洞宗中興の瑩山紹瑾（二二六八—一三三五）が開創したのも浄住寺（能州を付さず）で、両宗ともに重要拠点である。鉄牛道機（一六二八—一七〇〇）

黄檗僧懷玉道溫編『諸州伽藍開基記』について（高井）

一五八

の晋山が、元禄二年であるのも無関係とは思えない。

さらに宝洲版は、黄檗独立性易（一五九六—一六七二）の音切を卷末情報に採用しかけたものの断念したと見られる⁽¹²⁾。独立は、富士山信仰に並々ならぬ理解を示したとされる人物である。鉄牛が富士瑞林寺（開創延宝二年）の開山として招かれ、白隠が沼津松蔭寺に晋山することも、独立と富士山信仰に結縁されたと見ることが出来る。この地は富士山修験が盛んで、聖護院門下の強力な支配下に置かれた地であった⁽¹³⁾。実際に当時の曹洞宗総持寺下寺院が、駿河東部地方で隆盛したことがその証拠である⁽¹⁴⁾。つまり『伽藍記』は、広く黄檗支援寺院の寺列と結縁を示そうとしたことになる。

また稿本は、当初「七卷」にし、卷六の興聖寺・地蔵寺・松山寺に続き、鎌倉五山を入れる予定であったが宇治田原禅定寺の後に回した。そして、七卷に九州の禅宗寺院を配置、卷数を八卷に増やして永平寺—大乘寺・総持寺とした。それは、曹洞宗に対する寺列を、元禄三—四年の間に決めたことの証拠である。刊本は、卷一を飛鳥仏教に限定し卷二を増やし、時代と地域を見直して整理し、一卷を追加して十卷とした。これはつまり版本が、寺門本山派の優位に配慮しつつも、曹洞宗総持寺下を重視した傍証である。更に、『伽藍記』は、華蔵寺や龍溪院、松蔭寺といった寺院名を掲載していない。それは、それらの寺院が行基や役小角、皇籍や高僧といった

開創者でなかったからだと考えられる。

五 結びにかえて

『伽藍記』は、黄檗を支援する既成の寺社が歴史上重要な位置にあり、法縁を円滑に示していると思えるべきであろう。なので筆者は、同著が高泉編集の『東渡諸祖傳』、『扶桑禅林僧寶傳』正統、『東国高僧傳』の補助的役割も果たすと見てゐる。すると総持寺（派下の龍溪院）と智恩寺、および天台門跡衆と本山派、さらに三河と富士といった地域の関係に疑問が移るが、この寺院の関係と仏教思想については、別に一々の事例を明らかにするつもりである。

- 1 高井恭子「三河華蔵寺の黄檗版一切経」『華蔵寺所蔵鉄眼版一切経 調査報告書』西尾市教育委員会、二〇一二年所収。
- 2 岩瀬文庫所蔵、稿本『伽藍開基記』「後跋」元禄三年。
- 3 各巻の章名が「目録」と異なる場合がある。卷一の「和州靈区」は「和州名刹」、卷三の「諸州勝地」は「諸州精藍」、卷四の「阿州靈刹」は「阿州名刹」、卷七の「禅林勝地」は「諸州禅刹」、卷八の「禅林勝地」は「諸州禅林勝刹」に変わる。
- 4 高泉の序は「七」を「八」に変更している。
- 5 高井恭子「黄檗版『大明三蔵聖教目録』の成立と刊行」『黄檗文華』第一二六号、二〇〇五—二〇〇六年所収。
- 6 豊嶋悠吾「華蔵寺所蔵一切経の未刻刊記に関する考察」『華蔵寺所蔵鉄眼版一切経 調査報告書』所収。

7 高井恭子「華藏寺所蔵『黄檗版一切経』をめぐって」『黄檗文華』第一三三号、二〇一二年―二〇一三年所収。

8 前出高井恭子「華藏寺所蔵『黄檗版一切経』をめぐって」。なお、筆者は、現在これを以て「臨済正宗」というと考える。

9 高井恭子「三河龍溪院と華藏寺一切経をめぐって」『黄檗文華』第一二八号、二〇〇七―二〇〇八年所収。および「日本黄檗を支援した大名をめぐって」『黄檗文華』第二九号、二〇〇八―二〇〇九年所収。

10 鏡島元隆「清規史上における『瑩山清規』の意義」、および「宗統復古期より見たる瑩山紹瑾禅師の地位」『瑩山禅師研究』瑩山禅師奉讃刊行会、昭和四九年所収。

11 稿本『伽藍記』巻六、二七右。

12 註七参照。

13 これら日本黄檗の支援の中心は聖護院門跡であり、富士山修験は聖護院下の村山興法寺および東泉院が司っていたことをあげる（大高康正「富士村山修験と聖護院」『山岳修験』第五〇号、二〇一二年所収。ならびに「富士山東泉院と六所家旧蔵資料の概要」『六所家総合調査だより』第一〇号、二〇一二年所収）。富士山の寺社（浅間大宮・三島明神など）については『伽藍記』に記載が無い。これも、編集の目的を『伽藍記』に盛り込めない事情であったからだと筆者は見ている。

14 木村文輝「静岡県中東部地方における曹洞宗の廃絶・転宗寺院一覧」『禅文化研究所紀要』第四〇号、二〇一一年所収。

〈参考文献〉加藤正俊・林雪光・大槻幹郎編『黄檗文化人名辞典』思文閣出版、一九八八年。

〈キーワード〉

『諸州伽藍開基記』、黄檗、高泉、道温、寺門本山派

（愛知県立芸術大学非常勤講師）